

特集

在朝日本人実業家二世・三世の「内地留学」

はじめに

本稿は、一九四〇年時点で七〇万人を超える日本人が朝鮮に在住し、そのうちの二世・三世の教育をめぐる環境がどのようなものであったか、とくに高等教育を求めて内地に「留学」するものたちの接触領域がいかなる形で展開したのかを検討することを課題とする。検討対象は、明治初年にはもともと多くの朝鮮在留者を出した長崎県出身者で、とくに土着の実業家層の子どもに限定し、彼らにとって、内地への留学が何を指したものであったか、それによって何を得たのかを明らかにしてみたいと考える。

当該テーマに関する研究史としては、日本帝国における高等教育の問題について、とくに朝鮮と台湾の「植民地大学」を比較史的に取り上げたプロジェクト研究があり、制度や学知、そして機能や遺産に関する分析がなされており、また「学生生活調査」を利用した親の職業や就職先など興味深い論考があるが、両地に在住した内地人学生の内地留学に関して取り上げたものはない。^①

木村 健二

そのほかでも、在朝日本人二世・三世の内地への留学に関する研究は、管見の限り見当たらないが、アメリカ本土やハワイにおける日系二世の日本留学に関しては、ぶ厚い研究が蓄積されている。なかでも吉田亮によるプロジェクト研究では、移民が国境を交差して活動する際の象徴的存在として「越境教育の活動」を位置づけ、とりわけ一九三〇年代における活動の背景や、当該地域社会と個人に及ぼす影響・意味に関して考察している。^② また、同じ関西のマイグレーション研究会は、留学生にとって、一九三〇年代の日本とはどういう時代であったのか、そこでの生活はいかなるものであったのかを考察している。^③

そうした研究史の中から、送り出す側の意図や期待、受け入れ側の体制や方針、留学の結果や影響などに関してまとめてみると、以下のようなだろう。

まず、送り出しの意図や期待に関しては、小島勝は、日米関係悪化のなかで、「日本文化・日本精神」の再評価を求める一世による二世の日本留学推奨がなされたことや、円価低落による経済的理由、就職

場所の必要からくる実際の理由、日系市民の使命遂行（大和民族の長所を受け継ぎ、日米文化の融合と平和増進に寄与すること）、日本婦人のもつ謙讓美により謙讓的で和合的な家庭の雰囲気（慰安を形成するため、宗教団体による連繫的理由（浄土真宗における開教使育成）、漠然とした憧れと時代風潮（日布時事の記者であった山下草園）などをあげている。⁴ 東栄一郎は、一九二〇年代に行われた二世による日本見学団の企画したものが、親たちの世界観を反映した「架け橋論」であったとする山本恵里子の論考をふまえつつ、それが三〇年代になると、「国家の論理でゆがめられ、国益に貢献するものへと変容していった」とする。⁶

受け入れ側に関しては、日本力行会の永田稠や、早稲田大学出身で野田醤油株式会社からアメリカに労働組合問題と労務管理の研究を行い、傍ら『移植民と教育問題』（一九三三年）を著した大塚好などの主張、そして東京の日米学院（一九三〇年仏教系留学生寄宿舎日米ホームの創設を通して、一五、六歳を対象として一世の理想Ⅱ二世のアメリカ市民権と民族性の両立をめざす）、日本力行会の留学生学園（「教育的価値の認識」を掲げ、真の日本精神の体得が米建国国の精神を体得し、善良なる米国民たり得ると説く）、瑞穂学園（一九三二年に外務省と拓務省の後援で作られた海外教育協会による民族の海外発展の基石たらしめんとした）、早稲田国際学院（一九三五年早稲田大学の附属機関で、大学進学準備教育とともに、日本精神を強調する教育）、恵泉女学園留学生特別科（河井道子により一九三五年に二世留学援助により国際主義的風潮の回復をめざす）、⁷ 日語文化学校日系米人部

（一九三三年東京YMCA運営、日本語を教える学習援助の場として開設）、⁸ 熊本（熊本海外協会各地支部が幹旋し、九州学院・大江高等女学校、九州女学院等により、誘惑が少ないのと経費が安いのとで勧誘、⁹ いずれもキリスト教系の私学で他の一般学生と同様に婦人宣教師の助手を育てることを目的）などの活動に関する研究がある。

留学の結果・影響に関しては、国家主義的教育に影響を受けた日系二世を生み出すとともに、駐日アメリカ政府外交官に強い危機感をもたせたり、「弊害の最たるものは、日系二世の帰属の不明確化という問題」（東栄一郎）という結果を生んだり、¹⁰ 自身が日本人や日系二世に対して差別的な見方を無意識のうちにしていたことに気づかせられ、日本でもアメリカでもマイノリティの境遇に思いをはせるようになったこと（水野真理子）、¹¹ 日本へ留学して仏教を学んだことが「私たちの宗教」として精神的拠り所となつて強制収容所や再定住の過程で浸透していく原動力となったこと（守屋友江）、¹² YMCA日語文化学校における日本語カリキュラムが、戦後のカリフォルニア大学の日本語教育に影響を与えたこと（竹本英代）、¹³ ハワイへの「帰米」二世にとつての沖縄就学の意味するところを、厳しい葛藤や資源として位置づけられたこと（野入直美）¹⁴ などが指摘されている。

こうした在米日系二世の日本留学と、在朝日本人の「内地留学」とを、直接比較することはもとよりできないことはいうまでもない。しかも、在米二世の場合は、日本語教育も必要であり、「帰米」することも期待されていた。それに対して在朝日本人の場合は、日本の一地方から東京に進学する場合とほとんど変わらない状況にあったといえ

る。就職先も恐らく、長男であっても必ず朝鮮に戻って就職しなければならぬということではなかったであろう。それにもかかわらず、水野が指摘するように、日本内地に「留学」することによって、改めて朝鮮というものを見直す機会が与えられることもあったのではない、その点に着目して本稿は、あえて「留学」という範疇として在朝日本人の日本内地への進学を取り上げ、その意味するところを考察することにした。

1. 朝鮮生れの増加と教育環境

① 一九三〇年及び一九四〇年の朝鮮生れ

一九三〇年の国勢調査によれば、在朝日本人は五二万七〇一六人であり、そのうち「朝鮮生れ」は一五万四九五四人にのぼり、全体の二九・四%であった。ただし、内地の実家にもどって出産した場合に内地生れと記入したことも考えられ、実際にはもう少し多かったことが想定される。

一九四〇年の国勢調査によれば、表1に示すように、在朝日本人は七〇万七三三七人で、そのうち朝鮮生れは二二万六三〇二人に達し、その比率は三二%にのぼった。ただし、もう少し多かったであろうことは一九三〇年と同様である。¹⁶⁾なお、年齢階級別に示した六〇以上の人口一五九人は、一八八〇年以前の朝鮮生れということになって、考え難い。いずれにしろ、約三分の一が朝鮮生れとなっていたのである（一九三〇年代に親に連れられて朝鮮に渡った子どもたちも一定数い

たと思われ、その部分も含める必要があるが、現在までのところその実数は不明である）。

もう一度表1にもどって、どこの生れかに関係なく年齢階級別人数をみると、五〇九歳、一〇一四歳、一五一九歳、二〇二四歳のいずれもが六〇七万人の人口で、一九三〇年代に学齢期を迎えたことになる。

② 教育環境

朝鮮における教育機関は、初等教育に関しては、一八七七年の釜山日本人居留地役所内に作られた初等学校を嚆矢とし、日露戦後には中

表1 朝鮮国勢調査年齢及出生地別内地人
(1940年、単位：人)

年齢	朝鮮生れ	内地生れ	その他生れ	計
0～4	74,389	17,892	816	93,097
5～9	55,150	21,356	718	77,224
10～14	40,491	21,617	762	62,870
15～19	26,322	44,746	912	71,980
20～24	14,635	51,517	767	66,919
25～29	9,468	68,622	598	78,688
30～34	3,681	61,114	416	65,211
35～39	967	48,951	204	50,122
40～44	512	39,315	80	39,907
45～49	301	30,607	46	30,954
50～54	130	25,414	33	25,577
55～59	97	19,097	21	19,215
60～64	79	12,771	23	12,873
65～69	33	7,025	10	7,068
70～74	25	3,492	9	3,526
75～79	13	1,370	4	1,387
80以上	9	707	3	719
計	226,302	475,613	5,422	707,337

出典：朝鮮総督府『朝鮮昭和十五年国勢調査結果報告』（『韓国統計月報』第1,2号、韓国経済企画院統計局、1962年）、70頁より。

等学校を含めた居留民団立の学校が各地に作られ、韓国併合後、一九一三年の居留民団廃止以降は、「学校組合」によって運営され、一九一一年公布の「朝鮮教育令」に基づく朝鮮人側の普通学校と併存する形となった。¹⁷⁾

ついで、一九二二年の「新朝鮮教育令」によって、「内鮮共通の精神で同一制度の下に置く」とされた。ただし、「国語常用者」（尋常・高等小学校、中学校・高等女学校）と「国語を常用せざる者」（普通学校・普通学校高等科、高等普通学校・女子高等普通学校）に区別され、基本的に前者に内地人が、後者に朝鮮人が通うとされ、「特別ナル事情アル場合ニ於ケル相互入学ノ規定ヲ設ケ」とあつて、若干名がそれぞれの学校に通うことになった。

また、実業教育・師範教育・大学教育に関する規定も定められ、実業学校に関しては、商業・工業・農業学校で、内鮮共通とし、普通教育を施すとされた。師範教育に関しては、内鮮共学で、内地よりやや入学資格を低く設定され、尋常小学校又は普通学校卒業程度とし、男子七年、女子六年の教育を施すとされた。一九二四年度より開始の大学予科は二年間で、中学校または高等普通学校卒とし、一九三四年からは中学校又は高等普通学校四年修了者で修業年限三年とされた。大学は一九二六年度より法文学部と医学部が開始され、理工学部は一九四一年に設置された。¹⁸⁾

かくして、一九三一年時点では、中学校は一一校で高等女学校は二四校、一九三六年には中学校一五校（七一二五人）、高等女学校

二七校（一万一一七三人）と増加していく。一九三六年の大学在籍者は五四二人、大学予科は四四八人、専門学校は四二五〇人となり、一学年では、大学予科は一五〇人、専門学校も約一千人に過ぎず、そこに朝鮮人も入学するのであるから、先の学齢期人数六〇七万人の五分の一とすれば、一万二千人から一万四千人で、そのうち男子・女子それぞれ半々としても六千人から七千人ということになる。男子の中学校定員は一学年一四〇〇人であるから約五分の一、女子の高等女学校の定員は二二〇〇人であるから約三分の一しか入れない。これが大学になるとさらに狭き門ということになり、大学予科の定員は一五〇人であるから、中学校卒業生一五〇〇人の一〇分の一ということになる。専門学校も多くは朝鮮人向けであり、当時の朝鮮において、中産階級が多く進学率も高かったといわれる在朝日本人にとって、高等教育機関は十分とはいえない状況にあったのである。

2. 『大衆人事録』に見る進学状況

ここで使用する資料、東京帝国秘密探偵社による『第十四版大衆人事録』（外地、満・支、海外篇、一九四三年一月）は、その「凡例」によれば、「台湾樺太朝鮮南洋閩東州満洲支那海外に其住所を有する凡ゆる階級に亘る知名の人士を網羅せる」とあつて、「知名の人士」を網羅したというもので、朝鮮に関しては朝鮮人を含み、全部で三八三五人が記載されている。²⁰⁾ 全体として一定の「成功者」・「役職者」の家を掲載していたといえる。

そのなかで、一九四〇年の国勢調査時点で、山口県、福岡県、熊本県について第四位で四万三〇四人（五・七％）であった長崎県出身の実業家に着目する。長崎県出身者は、対馬や長崎市を中心に早くから朝鮮に進出し、経済活動に従事して土着し、三世も登場するようになっていたからである。

長崎県出身と記載された人物は八人で、全体の三・七％に当り、それは全人口比からすればやや少ないといえるが、その原因については不明である。その八八人のうち、実業家と見なし得る人物（ここでは個人営業主、会社役員、課長、支店長・支配人、技師等を想定している）は四九人を数え、それに官吏等二二人、医師九人、教員・教授八人が続く。警察官・裁判官を含めた官吏層が少ないのは、官吏層には出身地が記載されていないケースが多いのと、まだ朝鮮に渡航して日が浅いものたちが多かったことによつていよう。

それらのうち、子どもの記載がないもの、子どもの名前はあつても学歴が記載されていないものも半数以上ある。学歴が記載される場合は、中等学校以上が記載されているのであるが、そうした記載がない場合は、中等以上の学歴がない場合、意図的に記載しなかった場合、そして子どもがまだ小さい場合が想定されるが、それらは検討対象にはしていない。したがつてここから、進学率を割り出すことができないことはいうまでもない。²¹⁾

実業家四九人のうち、約半数の二四人について、男子三〇人、女子一九人の学歴が記載されている。平均すると一家に二人の子どもの学歴が記載されていることになる。その特徴は、男女別では男子が多い

表2 在朝日本人実業家二世・三世の進学状況（単位：人）

○男子

	学校	養子	嗣子	長男	二男	三男	四男	計
朝鮮	中学校	1	1	2	3	1		8
朝鮮	商業学校				3			3
朝鮮	京城法専			1				1
	小 計	1	1	3	6	1	0	12
内地	中学校			2			2	4
内地	商業学校					1		1
内地	高商	1	1	1				3
内地	薬専					1		1
内地	私大			5	2			7
内地	帝大・商大			2				2
	小 計	1	1	10	2	2	2	18
	合 計	2	2	13	8	3	2	30

○女子

	学校	長女	二女	三女	計	妻
朝鮮	高等女学校	5	5	3	13	1
内地	高等女学校	4	0	0	4	7
内地	専門学校	2	0	0	2	0
内地	女子高等師範	0	0	0	0	1
	合 計	11	5	3	19	9

出典：東京帝国秘密探偵社『第十四版大衆人事録』朝鮮の部、1943年より。

こと、兄弟姉妹上の地位では、男子は養嗣子・長男が一七人、二男から四男までが一三人で、やや養嗣子・長男が多いこと、女子は長女一人、二女・三女八人であり、既婚者は除かれており（まれに嫁いだとある場合もある）、未婚者をアビールする意図があつたことなどがあげられる。

学歴の男女別・地域別人数を示したのが表2である。ここからい

ることは、まず進学先は朝鮮か内地かという点では、男子は内地が一八人で、朝鮮が二人と内地が多く、女子は朝鮮が一人、内地が六人と朝鮮が多いことである。これは、女子は朝鮮の高等女学校に親元から通うケースが多かったこと、男子は内地の高等教育へ進学するものが多かったことに起因している(女子も専門学校は内地へ行っている)。内地の高等教育機関としては、男子の場合は東大経済、東大、東京商大、早大商、早大政経、慶大理財、法政、立教、富山薬専(各一人)、高千穂高商三人であった。文系が多かったといえるが、これは医学系統や工学系統への進学は医者や官吏の子にも多かったためと考えられる。なお、これらの実業家の妻の学歴の記載もあつて、それによれば、年齢的にみても高学歴であり、かつ内地の高等女学校出が多いことがうかがえる。さらに、養嗣子・長男といった、いわゆる跡継ぎ層の進学状況をみると、全部で一七人で半数を上回る。そのうち高等教育への進学者は一人であつて、卒業後実家を継承したものもある一方(東大経済、早大政経、慶大理財、高千穂高商卒業者)、内地の企業に就職したものもあつた(高千穂高商から月島機械株式会社)。跡継ぎといっても、高等教育の必要性が求められるようになっていたこと、実家の継承を必ずしも長男に求めなかった傾向となつていたことを示している。

同様の要領で山口県のケースも調べてみたが(男子七二人、女子四〇人)、男子は養嗣子・長男が四人、それ以外が三〇人で、やはり跡継ぎ層の方が多い。内地か朝鮮かは、長崎県のケースとほとんど同じで、男子は内地が多く、女子は朝鮮が多く、その理由も同様で

あつたと考えられる。なお、山口県のケースで、現職のみ記載している例が男子の場合に一九人みられた。これは、小学校のみで中等教育を受けていないと考えられ、全体で二六・四%にあたる。そのうち養子・嗣子・長男が一六人で、「跡継ぎには教育を受けさせない」という商家などにおける当時の慣習を反映したものといえよう。もつとも、長男でも内地の大学や朝鮮の高等専門学校に行っているものも見受けられ、一定の進学率の上昇や、長男以外のものによる跡継ぎの存在が考えられよう。

以上のように、在朝日本人においては、平均的には中等以上の所得階層が多かつたという中で、そうした層の子どもたちの中等教育以上の進学率も高かつたものと考えられる。しかも実業家の跡継ぎ層といふべき養嗣子・長男層の進学率も、今後はより上級の教育も必要になるであろうという家業の事情や、跡継ぎを長男層に限らない慣習も浸透するようになって、高まつていったといえる。しかし、一九三〇年代の朝鮮においては、それを満たすだけの教育機関は、とりわけ高等教育において整備されておらず、それを埋めるものとして、内地への留学があつたといつてよからう。

以下では、そうした在朝日本人のうち、実業家の家に長男として生まれ、朝鮮の中学校を卒業し、早稲田大学第一高等学院から早稲田大学に進学し、同大学に研究助手・教員として残つたU氏の講演記録によりながら、彼が行つた「内地留学」の実相と、その意味するところを考察していこう。

3. 内地留学二世からの聞き取り

ここで取り上げるU氏の講演記録「私の出会った朝鮮及び朝鮮人」は、一九九五年三月六日に東京農工大学で行われたもので、のちに木村が質疑応答を含めてテープ起こしし、保存しているものの一部（後半部分）を資料1として提示している。

U氏の略歴は次の通りである。母は長崎県対馬出身の商人で元山在住K家の長女、父は長崎市出身の商人で、結婚後、Kの実家のU家を継承した。U氏は一九一九年一月に元山で長男として生まれた。一九二三年頃一家は清津に引越し、U氏は一九二五年清津小学校入学、一九三一年羅南中学校入学、一九三六年早稲田第一高等学院入学、一九四三年早稲田大学理工学部卒業、同研究所助手を経て理工学部でリーダー、磁気の研究や、物理学の講義を行い、一九八九年定年退職、名誉教授となり（U氏が講演時に作成した「年譜」より）、一九九七年一〇月一三日亡くなられた。享年七八歳であった。

資料1 講演記録「私の出会った朝鮮及び朝鮮人」

（前半略）

羅南中学校のことをお話させていただきますと、⁽²²⁾当時の中学校はすべて五年制で、高等普通学校も勿論五年制です。⁽²³⁾クラスは二クラスで合計一〇〇人ぐらい。私の学年では朝鮮人が三名同時に入学しました。⁽²⁴⁾これは一つの資料になると思いますが、朝鮮には何々道というのが一三道あったわけですが、そのなかに朝鮮人が

知事になっている道もいくつかあったと思います。あるときに咸鏡北道の知事に朝鮮の人がなりまして、木村さん、名前の方を覚えておられますか。その息子の金博、⁽²⁵⁾我々は「キンパク、キンパク」なんて友達と呼んでおりました。そういう知事の息子が入学し、また会寧のほうのお金持ちの商人の息子ですね。さらに両班といっていたと思いますけれど、そういう人たちの息子が日本の中学校に入っていました。入学試験はもちろん一緒に受けるわけです。

心に残る人としては、李敏載、⁽²⁶⁾リミンジャともいうんでしょうか。これは晩年に良い友達付き合いをしました。ここに書いてあるように、学者として、あるいは教育行政家としても非常に優れた人になりましたが、私もソウルに行ってはこの人と会って、いろいろ話をするのが楽しみでありました。なかなか偉い人になりました。

戦時と教育についてはどうであったかというのは、私が中学校に入ったときに満洲事変が起こったわけで、その満洲に軍隊を、直接は関東軍というのがその役目でありますが、満洲の東のほうの南、さっき言った間島ですね、その付近は先ほどの第一九師団⁽²⁷⁾というのが対象とした戦略的な土地であったと思います。

羅南というのは軍都でありましたけれども、私の思い出としては、そのために教育がなにか日本の軍国主義というようなことで、締めつけられたという思いは、どうも不思議にないんですね。あるいは、そういうことに鈍感であったという、我々そこで勉強し

ているものたちに、事態を見極められない欠陥があったのかもしれない。

いわゆる軍事教練などは、配属将校が来ておりまして、談話なんかするんです。けれども、満洲事変が起こったとかいう、時局についての話は教官から聞いた覚えはないですね。割合自由な雰囲気があったといえるでしょうが、客観的には満洲に接した重要な場所であり、間島付近に騎兵連隊が行った際、とり囲まれて連隊長が戦死し、軍旗を奪われたという有名な事件、⁽²⁸⁾そういう局地的な戦争があったことは知っていました。その息子が私たちの同級にいました。その騎兵連隊の連隊長らは遺骨となって帰ってきました。幹部が皆やられたわけです。羅南の駅頭で遺骨を迎えるというような、忘れられない出来事がありまして、その息子はやがて陸軍幼年学校へ行きました。

騎兵連隊というものの価値がまったく低下したのは、こういう事件があったからです。中国の満洲の軍隊、ならびに匪賊と言われておりましたけれども、匪賊じゃなくて、中国や朝鮮にとっては義勇軍のようなものだと思います。そういうのに完全にやられたわけです。

話は飛びますが、私、東京では早稲田に入りました。⁽²⁹⁾これもまた軍国化するなかであります、かろうじて東京の早稲田あたりは自由な雰囲気が残っております。教養人と専門人という立場のなかで、いかに生きるべきかというような、あるいはそれらの緊張感というようなことを、意識しながら過ごしました。

私はキリスト教の寮に入りました。⁽³⁰⁾そのために、アメリカ人宣教師がそこで指導の中心にありまして、⁽³¹⁾そういう人たちを通じて、人間と社会の視野を少しはもつようにさせられ、普通よりも、こゝに国際関係については、もつようにさせられたと思います。そこで育ちましたということが、私の今日をしていると思います。

そこに朴在昌という、日本語読みで失礼しますが、早稲田大学の法学部の学生がおりました。⁽³²⁾この人はほんとうに立派な、品行方正という意味ではないんですけれども、人物としては非常に深みのある落ちついた人でありまして、この人は私よりも四つぐらい年上ですが、平壤の人でありました。南北分断後に韓国で平安道の知事になったのですが、それはどういふことかといいますと、韓国では北のほうの知事を任命しておったんですね。この方が平安道の知事になったということは、それだけ人望があったということでしょう。北から南へ避難をした人たちのお世話をするとこの方が、具体的な仕事でありました。

それから現在、朴在昌さんは曹晩植先生記念事業の常任委員長をしています。この先生は牧師ですが、平壤でロシア軍が入ってきたときに、殉教の死を遂げた方です。もしそういうことがなければ、この方は政治家としてもほんとうに重要な人物として、多くの人たちから推挙される、人望のあるまた実力のある人だったそうであります。この方の記念事業というのがあり、ソウルのいちばん大きなカトリック教会が明洞にあります、⁽³⁴⁾そのすぐそばにこの方の記念事業の一つとしてキリスト教会館ができていま

す。朴さんはその常任委員長で、専務理事のような立場にあります。そういうことを長らくやっている人で、私も韓国に行ったこの人と会うようにしているんですが、この方が同じ早稲田のキリスト教の寮におられて、親しみをもちましたし、いろいろ教えられました。

それからもう一人大事な働きをするのは、金興浩⁽³⁵⁾ 日本語読みで失礼します。これは梨花女子大学の教授を長らくやっております、大学つきの牧師、いわゆる学牧になったわけでありまして、定年で辞めて、いま聖書学者として活動しております。この方はほんとうに立派な人で、共に学生るとき、私はこの人からキリスト教を、対話を通して教えられました。いろんな人の影響を受けましたけども、金興浩さんはいまでもずっと交流のある方です。そういう方が、当時、一九三五年から四〇年にかけて、早稲田には留学生としてずいぶん来ておられまして、私はこういうキリスト教の寮関係で、このお二人と知り合いになったわけです。

キリスト教の寮は、早稲田奉仕園⁽³⁶⁾という団体に属しております、これはいまも活動しています。いろんな会合をよく開いています。在日朝鮮人の問題、韓国問題、それからアジアのほうほうの問題とか、そういう国際関係のいろんな集まりによく利用されます。セミナーハウスとしてのいろんなプランもやっております。そのキリスト教の寮に、昔、私が入っていたわけなので、普通の人よりも視野は広がったと思います。

そのころの話で、あるとき、どういうきっかけであったかわか

りませんが、阿部賢一先生⁽³⁸⁾という、のちに大学紛争時代は早稲田大学の総長に推された人ですけれども、この方が、いろんな講話というか、講演までいかないんですけども、座談をしてくれました。そのときに何人かの朝鮮人の早稲田の学生も同席していたんですね。

一九三九年ごろだと思えますけれども、急に一人が立ち上がりまして、「私の願いは朝鮮が独立することです」と、非常にはつきり言いました。そのとき皆はちよつとシユンとなりました。もう一九三九年ごろは、いわゆる日支事変もだんだんと深まって、そして非常に難しい時代でありました。そのときに、もちろん日本人をまじえた会合で立ち上がって言うということは、たいへんなことです。

特高という警察ですね、彼らにとってはキリスト教の寮というのは要注意のところでありました。そういうところでありましたので、阿部先生の話のなにかの期待をもつて来ていたと思います、ずいぶん思い切って立ち上がって言ったものだと思います。

そういうサークルは、そういうことが言えるような雰囲気があったからこそ、言ったと思うんですがね。我々も割合に、国際的な視野をもたされつつ、共同の生活をしておったわけです。そうしたら、阿部先生は、「君、しばらく待ちたまえ。そういう時代は来ますよ」と言われた。これも、これだけのことを言うのはいへんなことですね。「しばらく待ちたまえ」、それ以上のことを阿部先生は言わないし、立ち上がったものも言いませんでした

けれども、これはとても大きなことでした。それから数年にして、「独立をしたいんだ」と言ったその願望が達成されようとは私はほんとうに思いもよらなかったわけです。

戦後になりまして、個人の罪と政治構造の罪、自分は子供のときになにも知らないで、朝鮮の人たちと仲良く話したよとか、中学校ではこんな親しかったとか言いまして、政治構造の罪というものがあるんだということ、これは年とともに増して来たと思います。だから私ももう七〇何歳ですけども、いまでも毎年その思いは深まるばかりになりました。たいへん頭の働きの鈍いということだと思えますけども、そういうふうなことを経験しております。

朝鮮での出来事に関しては、一九三一年に入学した羅南中学校における朝鮮人同級生との接触の部面では、同級生に朝鮮人三人が入学し（実際は四人か？）、仲の良い友達としてつきあったようであるが、それ以上の感想は述べていない。そうした自分を、鈍感で、「事態を見極められない欠陥があったのかもしれない」と述べている。また、一九二九年から三十九年まで朝鮮伝道で知られた織田樗次が、清津にも伝道に来たことが、講演の際にU氏自ら作成した「年譜」に記載されているが（それは一九二九年の項にある）、それに対するコメントも付されていない。一九二九年であればU氏は一〇歳であるので、その時点では明確な反応はなかったものと思われる。

一九三六年に「東京で早稲田に入りました」とあるが、これは第一

早稲田高等学院のことで、年々の入学定員は文科が四〇〇人、理科が二〇〇人であったというが、一九三六年の志願者数は文科が一四六七人、理科が三八五三人で、理科の倍率は約二〇倍という狭き門であった（実際の入学者は三〇〇人前後であり、一九三六年度生の修了者は二六一人であった）。⁴⁰ 第一高等学院は中学四年から入ることができたが、U氏は中学五年卒業後入ったという。理科に入れば、大学も理工学部ということになったのであり、なぜ理系を選んだのかについては、U氏は別途のYMCAによる「インタビュ」において、小学生の終わりから中学生のころ、『子供の科学』という本でモーターの作り方や変圧器の作り方が載っていて、作ってみたりして「電気」に行きたいと思うようになったと語っている。⁴¹ ここでは、そうした子供のころからの希望が実現できる環境にあったということで、多くの朝鮮人とは非対称の存在であったという点に留意すべきであろう。

一九三六年に日本に留学して以降は、早稲田奉仕園の友愛学舎（寮）に入り、キリスト教関係の人びとと出会うことになる。そうした中で、アメリカのバプテスト派牧師として派遣されたベニンホフ友愛学舎舎監により、一九四〇年に洗礼を受ける。友愛学舎には常時二二、三人が住み、その寮費は二五円で、普通の下宿屋より一〇円くらい高く、⁴² 戦前に入舎した人たちは関西出身で、苜屋あたりの人たちが圧倒的に多かったですね（布施壽雄）とあり、⁴³ 一定の富裕層でなければ入れない所であった点も留意すべきであろう。

次に、タイトルを「私の出会った朝鮮及び朝鮮人」として講演をお願いしたため、とくに朝鮮人留学生に関して言及していただき、彼ら

から多大な啓発を受けたことが述べられている。それは、朝鮮の中学校では得られない経験であった。さらに、一九三九年ころの寮内での早稲田大学教授を囲んだ談話会で、朝鮮人留学生が立ち上がった「私の願いは朝鮮が独立することです」という発言に対し、阿部賢一教授が「君、しばらく待ちたまえ。そういう時代は来ますよ」と答えたりは、U氏にとつてたいへんショックな出来事であった。U氏は一九一九年の三・一独立運動が起こった年に生れたのであるが、朝鮮においては、そういう観点から自らの立ち位置をみることはできなかったようである。それが、東京の早稲田高等学院、あるいは友愛学舎における学びや出会った人びとなどの環境によって、U氏の視野を大きく広げさせることにつながったといえる。具体的には、U氏の言葉によれば、「人間と社会の視野を少しはもつようにさせられ、普通よりも、ことに国際関係については、もつようにさせられたと思います。そこで育ちましたということが、私の今日をしていると思います」と語っているところに現れている。また、佐藤信愛や篠崎茂穂など同時期の他の人びとの談話においても、同様の回想を確認することができる。五〇年以上たっても消えない記憶となつて残り、その後の韓国・韓国人を見る目を深化させていったのである。

こうした「事件」は他にも発生していたようであり、山田昭次によれば、戦時体制下に留学生のあいだで朝鮮独立の動きが高まっていたという。⁽⁴⁵⁾ また同じころ立命館大学においても、そこにいた石原莞爾も、一九四〇年の朝鮮人留学生新入生歓迎会で、「貴君等の祖国は必ず五年以内に独立するから、日本の法律や経済を学ぶにしても朝鮮の社会

に適應するような学び取り方をしなさい」と述べたという。⁽⁴⁶⁾

おわりに

以上、検討してきたところをまとめると、一九四〇年になると、在朝日本人の二世・三世（朝鮮生れ）は全体の約三分の一となり、朝鮮での高等教育機関が少ない中で、日本内地への進学（留学）を志すものも増加していくことになる。そうした機会が与えられたものには、朝鮮で財をなした実業家の子どもたちが多く含まれていたのである。

そうしたもののうち、朝鮮で中学校まで在学し、内地の大学に留学したU氏は、高等教育を受けるとともに、キリスト教の寮に入ることによって、とりわけ「人間と社会の視野」や「国際関係に対する認識」を持つようになる。そして、朝鮮人留学生の深みのある人物やキリスト教への信仰心にふれ、また独立を望む発言に深いショックを感じる体験をすることになる。そうした感覚ないし認識は、U氏にとつては、朝鮮にいた時期には覚知することのなかったものであり、そこにこそ内地留学の意味するものがあったということができるのである。

なお、筆者はかつて、新義州から引揚げてきた人びとにアンケート調査を行い、その結果をふまえて、朝鮮語や朝鮮料理、そして朝鮮文化で記憶に残っているものについて、いくつかのものをあげたことがある。⁽⁴⁷⁾ その際には明示しなかったが、日常生活の中で「自然に入ってきたもの」と、ここで紹介したU氏の朝鮮における中学校での朝鮮人生徒との体験は、ほぼ同等のものとして位置づけられよう。そしてそ

れはまた、水野が分析した在米日系二世の「無意識のうちの差別的な見方」(ここでのU氏は差別感はなかったということであるが)⁴⁸⁾とも符合するものであったといえる。それがU氏にあっては、日本内地の早稲田大学での学びやキリスト教に触れる過程で、朝鮮をめぐる政治的動向や被統治者の心情に初めて気づかされたという点を、ここでは強調したいと考える。

注

- (1) 酒井哲哉・松田利彦編『帝国と高等教育―東アジアの文脈から―』国際日本文化研究センター、二〇一三年。
- (2) 吉田亮編著によるものとしては、『アメリカ日本人移民の越境教育史』(日本図書センター、二〇〇五年)、『アメリカ日系二世と越境教育―一九三〇年代を主にして』(不二出版、二〇一二年)、『越境する「二世」一九三〇年代アメリカの日系人と教育』(現代史料出版、二〇一六年)の三冊がある。なお、アメリカ本土・ハワイ出生者の日本各地在留者に関しては、各県の海外協会が一九三〇年代初頭に調査し、その集計表や一覧表を公表したという(坂口満宏「一九三〇年代の福島県に在留した日系二世」根川幸男・井上章一編著『越境と連動の日系移民教育史 複数文化体験の視座』ミネルヴァ書房、二〇一六年)。福島県のほかに、広島県、福岡県、岡山県、熊本県、山口県などで調査が行われ、会報に掲載されており、広島県では『広島県滞在米布出生者名簿』一九三二年も刊行されている。
- (3) マイグレーション研究会編『来日留学生の体験 北米・アジア出身者

の一九三〇年代』(不二出版、二〇一二年)。

- (4) 小島勝「日本の移民教育論」(吉田亮編著「二〇〇五」所収)。
- (5) 山本恵里子「見学団と越境教育」(吉田亮編著「二〇〇五」所収)。
- (6) 東栄一郎「二世の日本留学の光と陰―日系アメリカ人の越境教育の理念と矛盾―」吉田亮編著「二〇〇五」所収。
- (7) 小島勝、東栄一郎前掲稿(吉田亮編著「二〇〇五」所収)。
- (8) 竹本英代「東京YMCAの日系二世教育」(吉田亮編著「二〇一三」所収)。
- (9) 物部ひろみ「熊本県における日系二世の留学―熊本海外協会をめぐる教育ネットワークの形成」(吉田亮編著「二〇一三」所収)。
- (10) 東栄一郎「一九三〇年代の東京における日系アメリカ人二世留学事業と日本植民地主義」(吉田亮編著「二〇一三」所収)。
- (11) そこでは、和歌山県出身の父と山形県出身の母とのあいだに一九一八年にカリフォルニア州の農村に生まれ、短大卒業後、一九三九年に早稲田国際学院を経て東京女子大に留学したメアリに関する分析を行っている(水野真理子「日系二世の日本留学と異文化理解の過程―メアリ・キモト・トミタ『ミエへの手紙』より」マイグレーション研究会編「二〇一三」所収)。
- (12) 守屋友江「日系二世仏教徒が見いだした『仏教』―比較思想史の視点から」(マイグレーション研究会編「二〇一三」所収)。
- (13) 竹本英代前掲稿(吉田亮編著「二〇一三」所収)。
- (14) 野入直美「ハワイ沖繩系二世の就学体験―帰米二世のライフストーリーを中心に」(吉田亮編著「二〇一三」所収)。
- (15) 『昭和五年朝鮮国勢調査』(朝鮮総督府、一九三〇年)

- (16) 『朝鮮総督府統計年報』によれば、毎年一二月末の人口が記載され、またそれぞれの年次の出生者数も判明する。その数は（朝鮮生れ、内地生れに関係なく新規出生数とみてよい）、一九二五年以降毎年一人を突破し、一九二九年末現在が一万八五五人、一九三八年末現在が一万六五一五人で、この一〇年間に一三万四六一七人が「出生」しており、一九三〇年から四〇年の一〇年間に一〇万人以上の朝鮮生れがいたことになるが、先の数値では差し引き七万一二三四八人でしかなく、実際には二世・さらには三世の数はずっと多かったといえる。
- (17) 『朝鮮総督府施政年報』一九一三年度、三五頁。
- (18) 『朝鮮総督府施政年報』一九二二年度、一五三～一六六頁。
- (19) 朝鮮総督府学務局『朝鮮諸学校一覧』一九三一年度、一九三六年度『日本植民地教育政策史料集成（朝鮮篇）』第五六巻、龍溪書舎、一九八八年、一〇七頁、第六〇巻、五〇六、三九〇～四八頁。
- (20) 芳賀登ほか編『日本人物情報大系』七五、朝鮮編（皓星社、二〇〇一年）に所収。
- (21) 一九三〇年代の中等学校への進学率に関する研究としては、地域別・父職別などに区分しつつ考察した、粒来香・佐藤俊樹「戦間期日本における職業と学歴——一八九六～一九二五年出生コホートにみる旧制中等教育の社会的地位——」（『教育社会学研究』第五六集、一九九五年）が参考になる。ただし、在朝日本人の場合は、日本内地の大都市よりも進学率は高かったものと考えられる。
- (22) 羅南中学校は、咸鏡北道の道庁があった鏡城郡羅南面に一九二三年五月に設置された公立中学校である。一九三一年時点で、朝鮮全体で中学校は一一校あり、五年制で、羅南中学校は一〇学級あり、生徒は内地人三四三人、朝鮮人一人という構成であった（朝鮮総督府学務局『朝鮮諸学校一覧』一九三一年度、前掲『日本植民地教育政策史料集成（朝鮮篇）』第五六巻、一〇七頁。
- (23) 一九一一年の「朝鮮教育令」によって、朝鮮人向けの中等学校として高等普通学校が置かれ、一九二二年に普通学校六年修了者に対し、修業年限五年とした。
- (24) 前掲『朝鮮諸学校一覧』によれば、一九三一年度の第一学年は内地人九〇人、朝鮮人四人とある。
- (25) 一九三二年段階の咸鏡北道知事は日本人（中野太三郎）で、参与官に金瑞圭がいた（『旧植民地人事総覧 朝鮮編』五、日本図書センター、一九九七年）。
- (26) 李敏載（一九一七～一九九一年）は、京城薬学専門学校を卒業後、北海道大学植物学科に留学し、一九四二年に卒業後は、満洲国国務院に就職、解放後韓国でソウル大学校などで科学史教育に従事した。
- (27) 第一九師団は一九一八年六月に朝鮮咸鏡北道羅南で編成された日本帝陸軍部隊。
- (28) 羅南には第二七騎兵連隊も置かれていた。「軍旗被奪事件」は、満洲事変の際の錦西の戦闘によるものか。被弾して焼失したという説もある（湯山豊治「朝鮮羅南の追憶」平和祈念展示資料館Web掲載）。
- (29) まず入学した第一早稲田高等学院は、一九一九年の「新大学令」を契機に、早稲田大学の基礎教育の予科として、一九二〇年四月に創設された（吉川秀雄ほか編『第一早稲田高等学院創立二十周年記念誌』

- 一九四〇年、二頁)。
- (30) 「友愛学舎」のこと。一九〇八年に大隈重信の要請により、アメリカのパプテスト派宣教師ベニンホフ(一八七四～一九四九年)によって創設され、現在にいたっている。
- (31) ベニンホフについては、斉藤善久「ベニンホフ博士とその時代」(早稲田奉仕園百年史編集委員会編『早稲田奉仕園百年史』二〇〇八年)が詳しい。U氏は、当初親戚の紹介する本郷の下宿に入ったが、早稲田付近でどこかないかと探していたとき、やはり親戚でクリスチャンの同志社の先輩が薦めてくれたもので、最初からクリスト教に関心があったわけではなかったという(同書、一〇七頁及び「質疑応答」より)。
- (32) 朴在昌は平壤出身で、朝鮮戦争期に南下し、韓国における平安南道知事やキリスト長老教聖部教会長老、さらに二〇〇八年時点で韓国の早稲田大学同窓会顧問を務めた。前掲『早稲田奉仕園百年史』に「一九三八～四二年」という一文を寄せ、そこで、「同時代の舍友・U早大教授が生存中には私的交流がありました」(一六九頁)と述べている。なお、一九三六年の在内地朝鮮人六九万五〇一人中、「学生生徒」(小学児童は別掲)は七八一〇人、そのうち東京には四三二六人いた(内務省警察局編『社会運動の状況』八、一九三六年、付表、三一書房、一九七二年より)。
- (33) 曹晩植先生記念事業については、朴在昌前掲に、「恩師である古堂曹晩植先生記念事業会(社団法人)を設立し、去る二〇〇六年一月二〇日に創立三〇周年記念行事を終えました」(二七〇頁)とある。
- (34) ソウル明洞カトリック教会は明洞聖堂で、一八九八年に建設された。
- (35) 金興浩は早稲田大学法学部に留学、一九四四年卒。韓国梨花女子大学校の「校牧」となった。U氏は『篠崎茂穂 人と信仰』(篠崎茂穂先生記念文集刊行会、一九九一年)に「篠崎先生ヨリ聞カサレ視セラレタモノ」という一文を寄せ(一三八～一三九頁)、また岩波哲男編『インタビュによる早稲田大学基督教青年会百年側面史』の増補再版(二〇〇七年)に「出会いは国境を超えて」というインタビュ記事(一九八七年二月実施)が掲載され、信愛学舎における日本人のまじめさやU氏などとの友情についての記載がある(六九～八二頁)。
- (36) 早稲田大学における朝鮮人留学生については、裴始美「李相百、帝国を生きた植民地人―早稲田という『接触領域』に着目して」(李成市・劉傑編著『留学生の早稲田―近代日本の知の接触領域』早稲田大学出版部、二〇一五年)を参照のこと。ここでは、一九四〇年の卒業生は二六七人で、財界(七一人)・官公吏(六二人)・一般会社(四七人)・教育(三九人)などに就職している(ただし財界・一般会社といっても自営業が多かったという、同書二二〇頁)。
- (37) 一九三六年に友愛学舎に入寮した前後のことについて、また戦後の信愛学舎の再建に尽力した件について、U氏はインタビュに応じて発言している(「戦時下の友愛学舎と青年会」一九八二年一〇月二三日、「YMCA会館信愛学舎再建へ」一九八五年七月一九日、前掲『インタビュによる早稲田大学基督教青年会百年側面史』一〇三～一三〇頁、二八五～三〇七頁)。
- (38) 阿部賢一(一九〇〇～一九七二年)は同志社中学から早稲田大学政経学部卒、同志社大学法学部、早稲田大学政経学部教授を歴任。

一九三七年、岳父徳富蘇峰の關係で大阪毎日新聞経済部長に就任。戦後産経新聞主幹（一九四七年公職追放）を経て、早稲田大学に復帰、総長を務める（一九六四～一九七二年）。主要著作に『財政学』上・下、改造社、一九二九、三〇年など（『阿部賢一先生追悼式次第』一九八三年九月）。阿部は、一九八〇年に開かれた座談会で、「鶴巻町にあった友愛学舎で僕が生活したのは一年間だけですが、友人がそこにいたので、よく友愛学舎へ行きました」と語っている（『座談会 石油工学科の新設と早稲田奉仕園』『早稲田大学史記要』第一四巻、一九八一年七月、一五七頁）。

(39) 織田栖次の朝鮮伝道については、韓ソクヒ「織田栖次と西田昌一の朝鮮伝道」飯沼二郎・韓ソクヒ『日本帝国主義下の朝鮮伝道』（日本基督教団出版局、一九八五年）があり、織田は一九二九年には咸鏡北道で伝道を行っている。

(40) 前掲『第一早稲田高等学院創立二十周年記念誌』一二～一三頁。なお、同じころ朝鮮（京城）から高等学院そして理工学部に進んだ人物として、総督府官吏の子供、佐藤信愛がいた（機械工学科）。京城の中学校にいた時の話を、「一般的には特に朝鮮の人を蔑視する傾向は強かった。」「信愛学舎には当時数人の半島の人と一、二の台湾の人がいたが、学舎内の雰囲気では植民地出身だからといってばかにするような態度をとる人はいなかった。だから今会っても心からうちとけられる。彼らの方にも優秀な人がたくさんいる」と語っている（『戦時下の信愛学舎を中心に』前掲『インタビュー』による早稲田大学基督教青年会百年側面史）七〇～一〇一頁）。

(41) 前掲『インタビュー』による早稲田大学基督教青年会百年側面史』一二～一三頁。実際に、理工学部の教授であり、早稲田奉仕園の活動でU氏と出会うことになる山本忠興教授は、子供向けに『子供電気学』という本を出している（同書は、小学生全集第五七巻として、興文社より一九二九年に刊行されている）。

(42) 前掲『インタビュー』による早稲田大学基督教青年会百年側面史』一〇八頁。

(43) 前掲『座談会 石油工学科の新設と早稲田奉仕園』一五八頁。布施は、一九四五年に理工学部機械工学科に入学し、友愛学舎の舎生となり、その後同舎に勤務したという。

(44) 篠崎茂穂・信愛学舎舎監の「二、三の思い出」（『信愛学舎創立五〇周年記念文集』一九六六年、前掲『篠崎茂穂 人と信仰』三九五～三九六頁に再掲）に、「韓圭鐘君が早大学生の卒業送別会で祝詞を述べた際韓国の独立に言及したと云うので」「戸塚警察署が韓君を抑留し、自分も特高課長から呼び出しを受けた、ということを書いている。なお「信愛学舎」は、早稲田大学Y M C Aの本拠の寮として、「聖書を媒介としてY M C A運動を担っていこう」ということで、一九一六年に創設された。一九二〇年代には、山本忠興理工学部教授を中心に、土居誉雄理事、学生であった「ファンダメンタルな」篠崎茂穂（後に舎監となる）、「無教会の伝統を受け継いだ」酒枝義雄、「熱心派の」名取順一などが方向を決定していったという。その際、「戦争期には、中国、韓国からの若干の留学生との交流があった」という点も付け加えられている（岩波哲男「早稲田百年とキリスト教」編集後記にかえ

て」前掲『インタビューによる早稲田大学基督教青年会百年側面史』三一四～三一五、三二〇頁。U氏は戦後に早稲田大学YMCA副会長から会長を歴任している。

- (45) 山田昭次「朝鮮人留学生たちの民族的苦悩と受難」老川慶喜・前田一男編著『ミッション・スクールと戦争―立教学院のディレンマ』東信堂、二〇〇八年。

- (46) 河原典史「朝鮮人学生の留学と就業―立命館大学の場合」前掲『来日留学生の体験』所収、一六七頁。原典は立命館大学ウリ同窓会『玄界灘』四、一九八二年、一八頁。なお、石原莞爾の東亜連盟運動における「朝鮮独立論」については、松田利彦「植民地末期朝鮮におけるある転向者の運動―姜永錫と日本国体学・東亜連盟運動―」（『人文學報』七九、一九九七年三月）において、必ずしも額面通りでなかったことが指摘されている。

- (47) 「植民地下新義州在住日本人の異文化接触」戸上宗賢編著『交錯する国家・民族・宗教 移民の社会適応』不二出版、二〇〇一年。

- (48) その一方で、朝鮮憲兵隊司令部が編纂した『朝鮮同胞に対する内地人反省資録』（一九三三年）に記載されたような、露骨な差別感や差別的言動を行う内地人もいたのであって、それらの中には、無意識のうちにそうした行動をとっていたものもあったであろう。

（きむら けんじ・下関市立大学名誉教授）

Study in Mainland Japan on the Second or Third Generations of Japanese Businessmen in Colonial Korea

KIMURA Kenji

Abstract

This article aims to examine the educational environment of the second or third generations of the more than 700,000 Japanese people who lived in Korea in 1940, and the nature of their contact with mainland Japan in search of higher education.

The target of consideration is Nagasaki prefecture, which had the largest number of people entering Korea in the first stage of the Meiji era. The subjects under consideration are the children of indigenous businessmen. I aspire to clarify their goal in studying in Japan as well as what they gained from this experience.

The results showed that, first, the number of second or third generation Japanese people living in Korea had grown to approximately one third of the total population in 1940. Second, as there were few higher education institutions in Korea, an increasing number of them strived to go to Japan to study in the mainland of the country. However, such opportunities were only available to the children of wealthy businessmen in Korea.

This article focuses on Mr. U., who attended the old junior high school in Korea and studied at a Japanese university. Along with his higher education, his entrance into a Cristian dormitory provided him with a “perspective on human and social affairs” and an “awareness of international relations”. Furthermore, he experienced a strong shock when a Korean student who advocated for independence from Japan spoke out. For Mr. U., this is something he could not have achieved during his time in Korea, which embodies the significance of studying in Japan.